慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大学生の挫折経験に関する心理学的考察 : 挫折観と自己成長感との関連
Sub Title	Psychological study of college students' "zasetsu" experience : view of "zasetsu" and feeling of self-growth
Author	神原, 知愛(Kanbara, Chiai)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.67 (2009.) ,p.59- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000067-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大学生の挫折経験に関する心理学的考察

――挫折観と自己成長感との関連――

Psychological Study of College Students' "*Zasetsu*" experience

—View of "*Zasetsu*" and Feeling of Self-Growth—

神　原　知　愛*

Chiai Kambara

The purpose of present study was to clarify what "*zasetsu* (a setback or a frustration)" is for college students and what their overcoming it is like. First, I examined their views of "*zasetsu*" to make what "*zasetsu*" is for them clear. Second, for the clarification of what college students' overcoming "*zasetsu*" is like, I examined how the views related with their feelings of self-growth after the "*zasetsu*" experiences. The results were as follows: (1) the views of "*zasetsu*" could be divided into four aspects; "frequency", "recovering", "(self-)growing", and "turning point", (2) except "frequency", the high "recovering", "(self-)growing", and "turning point" related with the strong feeling of self-growth. For making the two questions clearer, to examine the views of "*zasetsu*" more deeply is needed.

1．問題と目的

我が国では，1950年代後半から始まった高度経済成長に伴って大学進学率が上昇するなか，1964年に国立大学教養学部の大量留年が明らかになり，それを契機として大学生の留年の増加が社会問題化した（下山，1996）。現在も尚，全国の国立大学内だけでも留年者数は10年間連続で２万人を超えている（内田，2007）。このような状況の原因の1つとして，学生が学業や大学生活そのものに興味を見出せない，もしくは自分の未来に希望が持てないような無気力状態になっていることが考えられる。それでは，このような大学生の無気力とは一体どのようなものなのであろうか。ここで，大学生に特有な無気力状態として Walters（1961）の提唱した「スチューデント・アパシー（Student Apathy）」が挙げられるが，これはもともと臨床場面から生じたものである。しかし，大学生の無気力の全体像をとらえるためには，疾病レベルとしてのスチューデント・アパシーだけでなく，より一般的な大学生の無気力傾向も見る必要があるだろう。これを実証的に扱った研究は多くないが，たとえば鉄島（1993）は，自我同一性の確立や大学進学の動機，家庭内での父性の問題と一般的な大学生の無気力傾向との関連を指摘した。また，"入学した大学が第1希望の大学ではなかった"，"授業・実習のレベルについていけない"

*慶應義塾大学大学院社会学研究科

などの挫折感から無気力傾向が発生している（齋藤，2005）という指摘もある。このように，大学生の無気力状態は特異的な障害だけでなく，たとえば大学進学の際の「挫折」のような何かをきっかけとして陥ることも考えられる。

では，そもそも無気力を生み出すような「挫折」とは何なのであろうか。今まで，挫折とは何かを定義づけ，それを実証的に扱ったり心理学的な考6察を与えたりした研究はほとんどないと言えるだろう。たとえば神谷・伊藤（1999）は，挫折体験の受容（“挫折経験に伴うネガティブな感情が消失し，「今ではいい思い出である」あるいは「今思い出してもなんとも感じない」と判断する”こと）に注目し，個人の有能感や未来展望を好ましい方向へと変化させることとの関連を見ているが，その挫折の定義づけは行われていない。また，佐藤（1999）は，“現実の否定的な出来事”を挫折として扱って自己概念との関連を見ているが，それは失敗体験と区別されることなく扱われている。ちなみに，辞書（『大辞泉（増補・新装版）』）上での挫折は，「仕事や計画などが，中途で失敗しだめになること。また，そのために意欲・気力をなくすこと」とされている。しかし失敗といえども，普段するような失敗や自身にとってさほど重要ではない失敗であれば，それが無気力状態に陥るような「挫折」を導くとは考えにくい。それでは，失敗のなかでも挫折につながるような失敗とはどのようなものなのだろうか。

以上のことから，大学生の無気力に結びつくような“挫折とは何か”をまずは解明する必要がある。そのためにはまず，動機づけ理論の中でも失敗によって生じる無気力を扱う，Seligman & Maier（1967）が提唱した「学習性無力感（Learned Helplessness）理論」が手がかりとなるだろう。しかし，“挫折とは何か”という疑問を解明するためには，この理論だけでは不足する点が2点挙げられる。まず1つめは，学習性無力感理論での“失敗”の挫折に対する一般化可能性である。この理論では，何か回避したいものを自分で統制して回避できないという統制不可能性，または自分の行動と出来事が随伴していないという非随伴性を認知することが“失敗（failure)”とされている。また，学習性無力感理論研究の多くは，“失敗”である統制不可能性（非随伴性）の認知を人間に起こさせるために，算数課題やアナグラム課題（文字を並び替えて単語を作る課題）などのテスト課題が用いられているものがほとんどである。これは倫理的問題のためでもあるが，実際の文脈での無気力につながるような“挫折とは何か”を検討するために，そのような“失敗”をどこまで応用できるかが疑問である。したがってまずは，実際に大学生にとっての“挫折とは何か”を見る方法の1つとして，挫折をどのようなことだと捉えているか（挫折観）を検討することが挙げられる。

そして2つめは，統制不可能（非随伴的）な出来事または否定的な出来事に対する，主観的価値を考慮することである。これは鎌原ら（1983）や荒木（2003）も指摘しているように，今までの学習性無力感理論では，統制不可能（非随伴的）な出来事または否定的な出来事の原因帰属様式に注目しすぎて，その出来事が本人にとってどのような意味を持っているのか（つまり，その出来事にどのような価値を感じているのか）があまり検討されてこなかった。しかし，失敗したことに対して主観的な価値を感じていたかどうかは，その後無気力状態に陥りやすいかどうかに影響を及ぼす可能性がある。たとえば，Feather & Davenport（1981）は失業者を対象に，就職に対して価値を感じている者ほど就職に失敗した際落ち込む度合いが高いことを明らかにしている。このように，失敗は失敗でも，主観的な価値を感じていたことに対しての失敗が，より無気力状態を生み出す挫折につながりやすいということも考えられる。そこで，実際に挫折をした対象に主観的価値を感じていたかどうかについても調べる必要性がある。

ここで，大学生の無気力に結びつくような“挫折とは何か”を見ようとする際，もう1つのことを検討する必要がある。それは，どのようなことが挫折による無気力状態から抜け出すということなのか，つまり，“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”ということである。この疑問を解明することができれば，実際に挫折によって無気力状態に陥っている者に対して，そこから抜け出すために何らかの働きかけができるのではないだろうか。したがって教育的視点で見ると，この疑問を解明することは不可欠だと思われる。

神谷・伊藤（1999）は，挫折経験に伴うネガティブな感情がなくなり，「今ではいい思い出である」あるいは「今思い出してもなんとも感じない」と判断するようになるという“挫折体験の受容”に注目し，それができれば個人の有能感や未来展望を好ましい方向へと変化させることができるとしている。しかし，このような挫折体験の受け入れだけではなく，その体験によって自分が精神的に成長したあるいは強くなったと認知するような挫折に対する積極的な意味づけも，ポジティブな未来展望につながるのではないだろうか。たとえば神藤（1998）は，中学生が学業活動におけるストレスを乗り越える際に自己成長感を感じると，後の学習に対する意欲が高まることを明らかにした。したがってまずは，“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”を検討する際，実際に挫折を経験した後に自己成長感をどの程度感じているかについて見る必要がある。ここで考えられることとして，挫折経験によって自分が成長したと感じていれば，その経験自体に対してもポジティブな意味づけを行っている，つまり，その経験をポジティブなものとして捉えているということが挙げられる。よって，自己成長感と挫折をどう捉えているかという挫折観との関連についても検討する必要があるだろう。

以上のことから，本論の目的は，“挫折とは何か”と“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”を，挫折観やそれと自己成長感との関連を検討することで明らかにし，大学生の挫折経験について心理学的に考察することである。したがって，研究1では主に失敗と挫折との違いに焦点を当てて“挫折とは何か”について検討し，研究2では挫折後の自己成長感に焦点を当てて“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”を検討していく。

2. 研　究　1

2.1　目的

“挫折とは何か”を解明するためにまず，実際に大学生がどのようなことを挫折だと捉えているか，つまり挫折観を調べる。また，ただの失敗との違いを明確にするために，失敗とはどのようなことだと思うかという失敗観も調べ，挫折観との比較を行う。さらに，挫折をした対象に主観的価値を感じていたかどうかも見ていく。

2.2　方法

調査対象者） 18歳～66歳まで（最頻値＝23）の112名（男性：39名，女性：73名）。年齢の内訳は，10代：12名，20代：62名，30代：17名，40代：14名，50代：4名，60代：2名，不明：1名であった。大学生の挫折経験を明確にするため，青年期後期[1]以外の年齢の者も含めた。

調査時期と調査方法） 調査は，2007年7月～8月に質問紙法（大学構内またはEメールで配布・回収）によって行われた。

尺度） ①失敗観と挫折観（秋田（1996）参考）：具体的には，「「失敗」とは（　　）のようだ。なぜな

ら，（　　）からだ。」という形式で，失敗の比喩生成とその説明を括弧内に記入することを求め，挫折に対しても同じように行った。

②主観的価値（Ecclesら（1983）参考）：Ecclesら（1983）の提案した主観的価値の構成要素（達成価値，実用価値，内発的価値，コスト）をもとにして6項目[2)]を作成し，その中から当てはまるもの全てを選択させた。

2.3　結果と考察

挫折経験の有無） 全体では，経験あり85名（75.9%），経験なし27名（24.1%）であった。青年期後期は，経験あり51名（68.9%），経験なし23名（31.1%））であった。

失敗観と挫折観） 分類の対象となったのは，無回答者と比喩になっていないものを回答した者を除いた94名であった。作成された失敗と挫折の比喩とその説明を見てみると，双方に共通する次の4側面の分類が見出された[3)]（表1参照）。この4側面とは，「よくあること」「大抵の人は一度くらい経験する」

表1　失敗と挫折の比喩内容

A.「頻度」(12) A1. よくあるもの（事故(2)，大したことのないもの，空気，歯磨き，ありふれたこと，コメディー，新入社員，信号，全ての基） A2. 時々あるもの（マラソンの坂，壊れそうなラジオ）	A.「頻度」(6) A1. 1度もしくはたまにあるもの（思春期，七夕，交通事故，掘りごたつ） A2. くり返しあるもの（自分の人生，筋肉）
B.「回復」(14) B1. すぐに回復できるもの（落とし穴(3)，転ぶこと(2)，雑草，こぼれた水，携帯の電池切れ，夜，軽い風邪，虫刺され，階段） B2.（苦い）薬(2)	B.「回復」(30) B1. 回復に時間や労力が必要なもの（泥沼(3)，落とし穴(3)，傷(2)，折れた翼，谷，長いトンネル，大地震，鞭，無人島） B2. 回復不可能なもの（闇(6)，折れた植物(3)，試練，株式マーケット閉鎖，ノックダウン，脱皮，信念が打ち崩された時，行き止まり，ポッキー）
C.「成長」(42) C1. 成長につながるもの（チャンス(4)，踏み台(2)，成長(2)，階段(2)，教科書(2)，原石(2)，強くなるためのきっかけ，険しい近道，ハードル，落ち葉，根性試し，社員旅行，靴擦れ，リセット，学習問題，先生，経験値，見えない障害物，成功の母） C2. 糧となるもの（人生のヒント・アドバイス(4)，（苦い）薬(3)，栄養(2)，いい経験(2)，お酒，細胞，パンチ，スパイス）	C.「成長」(17) C1. 成長につながるもの（試練(2)，ビックリ箱，ユニフォームの汚れ，バネ，学校，先生，課題トンネル，骨折，枝，富士登山，必要なプロセス，経験，始まり） C2. 糧や土台となるもの（礎，糧，スパイス，土）
D.「転機」(4) 成功へのステップ，チャンス，光，必要なもの	D.「転機」(15) 分岐点(4)，転機(2)，道しるべ，終わりであり始まり，靴，一休み，運命，行き止まり，ターニングポイント，本当の敗北，雷に打たれた木
E. その他 例） 崖崩れ（防ごうと思えば防げるから） 因果応報（何らかの原因があるから） ナイフ（心が傷つくから） 自分の書く字（毎回違うし，良し悪しがあるから）	E. その他 例） 二日酔い（二度とくり返したくないから）， テスト（受けた後に何をするかの方が重要だから） 青春（後になってこうすればよかったと思うことが多いから）

注：括弧内は人数を表しており，括弧のないものは1名だったものである。

など，失敗や挫折の頻度に関することについての“頻度”，「なかなか元の位置に戻れない」「その先には光が望めないように思える」など，失敗や挫折からの回復についての“回復”，「そこから学べることが多い」「それによって強くたくましくなる」「それを通して成長する」など，失敗や挫折から何かを学べたり成長できたりすることについての“成長”，そして「次の方向性を考えることができる」「その経験をもとに行動を改めることができる」など，失敗や挫折の経験によってその先の方向性が決まることについての“転機”である。“回復”と“成長”との違いは，“回復”は失敗や挫折から回復できるかどうかについてのみ言及されているが，“成長”はさらに失敗や挫折に対する何らかのポジティブな意味づけについて述べられているという点である。以上の4側面に分類しきれないものは“その他”とした。

この分類結果から，失敗観は，「成長」（44.7%）が比較的多く，「転機」（4.2%）は比較的少ないことがわかった。一方挫折観は，「回復」が比較的多く（31.9%），「頻度」（6.4%）は比較的少ないことが見出された。このことから，挫折とはどのようなものかを考える際，それがどのくらいの頻度で起こるかということよりも，そこから回復できるかどうかということに焦点が当てられやすい可能性がある。したがって，“挫折とは何か”を検討する際に，挫折からの回復に関する“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”についても注目する必要性が確認されたと言ってもよいだろう。

主観的価値） 主観的価値を何も感じていなかった者は3名（3.6%）（青年期後期は2名（4%）のみであった。したがって，挫折経験のある者のほとんどが対象に主観的価値を感じていたことが考えられる。

3. 研　究　2

3.1　目的

研究1の結果から挫折観尺度を作成し，それにより挫折観を測定する。また，“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”を検討するため，挫折をどう捉えているかという挫折観と，挫折経験に対するポジティブな意味づけとしての自己成長感との関連を見る。

3.2　方法

調査対象者） 首都圏内にある4校の大学1年生から修士2年生までの518名（男性：260名，女性：255名，不明：3名）。このうち，挫折経験ありと回答した356名（男性：177名，女性：178名，不明：1名）を分析の対象とした。

調査時期と調査方法） 調査は，2007年11月～12月に質問紙法（授業時間内に配布・回収）によって行われた。

尺度） ①挫折観4項目（“頻度”：「挫折とは，よくあることだ」，“回復”：「挫折からの回復は，すぐにできる」，“成長”：「挫折を経験することで，精神的に成長したり強くなったりする」，“転機”：「挫折とは，今後の自分の人生を左右するものだ」。すべて「全くそう思わない（0）」から「とてもそう思う（3）」の4件法で測定）

②自己成長感7項目4（石毛・無藤（2005））（「全く当てはまらない（0）」から「よく当てはまる（3）」の[4]件法で測定）：この尺度は，ストレスフルな状況を乗り越えた後の自己成長感を測定するものであることから，同じようにストレスフルな状況である挫折後の自己成長感を測定するものとして

使用した。

3.3　結果と考察

挫折観４項目の高低） 挫折観4項目の平均値は，それぞれ以下の通りである。“頻度”はM=1.87（SD=.89），“回 復”はM=1.12（SD=.81），“成 長”はM=2.46（SD=.74），“転 機”はM=2.36（SD=.78） だった。ここで，これらの平均値をもとに，“頻度”と“回復”は値が0と1の者は得点が低い者，2と3の者は得点が高い者とした。また，“成長”と“転機”は値が0から2の者は得点が低い者，3の者は得点が高い者とした。

挫折観と自己成長感との関連） 挫折観と自己成長感との関連を見るため，挫折観の各項目の得点が低い者と高い者との間に，自己成長感の得点に有意な差があるかどうかを調べた（t検定）。まず，“頻度”の得点が低い者（M=10.53）と高い者（M=10.71）との自己成長感得点に，有意差は見られなかった（t(335)=.36，p=.72）。次に，“回復”の得点が低い者（M=10.26）と高い者（M=11.63）との自己成長感得点に，有意差が見られた（t(335)=2.70，p=<.01）。また，“成長”の得点が低い者（M=8.03）と高い者（M=12.54）との自己成長感得点にも，有意差が見られた（t(336)=11.39，p<.001）。最後に，“転機”の得点が低い者（M=9.90）と高い者（M=11.37）との自己成長感得点にも，有意差が見られた（t(335)=3.24，p=.001）。つまり，“頻度”以外の“回復”，“成長”，“転機”では，得点の高い者が挫折後に感じている自己成長感も高いということである。具体的には，「挫折からの回復は，すぐにできる」，「挫折を経験することで，精神的に成長したり強くなったりする」，「挫折とは，今後の自分の人生を左右するものだ」と捉えているほど，挫折経験による自己成長感も高いということが明らかになった。

4.　総 合 考 察

4.1　“挫折とは何か”について

研究1において，大学生の無気力につながるような“挫折とは何か”の検討を試みた。そのために，既存の理論で無力感を引き起こすとされている失敗と挫折との区別を明確にすることが重要と考え，まずは，失敗や挫折をどう捉えているかという失敗観と挫折観とを検討することによってそれを行った。

その結果，まず，失敗観と挫折観とには“頻度”“回復”“成長”“転機”という共通する4側面があることが見出され，失敗観には失敗は人生の転機になるという“転機”についての言及は比較的少なかった。この結果は，失敗とは，たとえ無力感を生じさせるとしても，それが人生の転機に結びつくほど重要ではないものである，ということを示唆している可能性がある。このことから，失敗と挫折との違いは重要性にあると考えられ，“挫折とは何か”を検討する際には，挫折をした対象が自分にとって重要であったことが鍵となると言えよう。そこで，挫折した対象に主観的価値を感じていたかについて調べた結果でも，そう感じていたと回答した者が圧倒的に多かったことから，挫折対象は自分にとって価値のあるものであったことが考えられる。

一方，挫折観には挫折からの回復について述べられている“回復”が比較的多く，“頻度”は比較的少なかった。つまり，挫折とはどのようなことかを考える際，それがどのくらいの頻度で起こるかどうかというよりは，そこから回復できるかどうかに注目されやすいことが示されたと考えられ，同時に“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”について検討する意義が確認されたと言える。

4.2 “挫折を乗り越えるとはどのようなことか”について

研究2では研究1の結果をもとに，“頻度”“回復”“成長”“転機”の4側面で挫折観を測定した。また，“挫折を乗り越えるとはどのようなことか”を検討するために，挫折経験後に自己成長感を感じていることを乗り越えにつながる状態と考え，挫折をどう捉えているかという挫折観と自己成長感との関連を見た。

その結果，挫折観の“頻度”以外の“回復”“成長”“転機”の得点が高い者の方が，自己成長感が有意に高いということが明らかになった。つまり，挫折からの回復はすぐにできる，または挫折を経験することで精神的に成長できる，もしくは挫折は自分の人生を左右するものであると捉えている者ほど，挫折によって自分が成長したと感じていることが示された。ここで特に注目すべきことは，“転機”の「挫折とは，今後の自分の人生を左右するものだ」と考えているほど自己成長感が高いという点であろう。なぜなら，自己の人生を左右するということは，ポジティブな場合だけでないことも十分あり得るからである。このことから，挫折によって自分が成長したという感覚と関連しているのは，挫折をポジティブに捉えていることだけではないということも考えられる。

4.3 今後の課題

本研究で行った，挫折をどのように捉えているかという挫折観を見ることで“挫折とは何か”を検討するということは，非常に探索的なものであった。しかし，これまでの心理学的な研究において自明のように扱われてきた「挫折」という用語を，動機づけ理論を手がかりとして検討したことは，非常に意義のあることだと思われる。また，挫折というものを扱うことで，学習性無力感理論に今まで取り入れられることの少なかった主観的価値という視点を取り入れて検討できる可能性を高めたと言っても過言ではないだろう。

だが，本研究には問題点が少なくとも3つある。まず1つめは，研究2の分析方法についてである。本研究では，挫折観の各項目の得点が低い者と高い者との間に自己成長感得点の有意差があるかどうかを調べることで，挫折観と自己成長感との関連を見た。しかし，この関連を検討するにあたって，たとえば挫折観全体の傾向をパターンに分け，その各パターンと自己成長感との関連を見るなど，他の分析方法も考えられる。本研究では挫折観尺度の項目数が少ないために挫折観全体の傾向をパターン分けすることは困難であったが，今後は項目数を増やすことで，より様々な方法で挫折観と自己成長感との関連を見る必要がある。また，2つめの問題点は，失敗と挫折との区別が未だ曖昧という点である。たとえば，挫折対象に対する主観的価値については調べたが，失敗対象に対する価値については見ていないため，失敗対象に対して主観的価値を感じていた可能性も考えられる。さらに，3つめの問題点として，失敗観と挫折観の分類が粗雑であることが挙げられ，“頻度”などの4側面で本当に挫折観を捉えられているかどうかも不明である。そこでこれらの問題点を改善するために，失敗観や挫折観をもう一度検討し直す必要がある。したがって，今後も引き続き失敗や挫折への意味づけに注目し，まずは何をどのように挫折と捉えるようになるか，つまり，自分にとって否定的な出来事をただの失敗ではなく挫折と捉えるようになる過程について検討していきたいと思う。

注

1)　ここでいう青年期後期の者とは，現在は「青年期の遷延」現象が生じている（齋藤，2005）という指摘から，18

歳から20代最後の29歳までの者とした。

2) ①「あなたは，それ（挫折をした対象）が自分にとって重要である，と感じていた」（達成価値），②「あなたは，それが自分の将来のために役立つ，と感じていた」（実用価値），③「あなたは，それが面白い／楽しい，と感じていた」（内発的価値），④「あなたは，それをすることが好きだった」（内発的価値），⑤「あなたは，それに努力を費やしていた」（コスト），⑥「あなたは，①〜⑤のどれも感じていなかった」。

3) 本分類の評定一致率は，他の評定者1名の評定結果との一致率を求めることによって算出し，失敗の一致率は90.4%，「挫折」の一致率は86.2%であった。また，不一致箇所は協議によって解決した。

4) 「精神的に強くなったと思う」，「人間的に成長したと思う」，「粘り強くなったと思う」，「自分の人生を切り開いていく自信がついた」，「人に負けたくないと思うようになった」，「物事に対して積極的になった」，「やればできると自信がついた」。

引用文献

秋田喜代美，1996，教える経験に伴う授業イメージの変容 ―比喩生成課題による検討―教育心理学研究，**44**，176–86.

荒木友希子，2003，学習性無力感における社会的文脈の諸問題　心理学評論，**46**(1)，141–157.

Eccles (Parsons)，J.，Adler，T. F.，Futterman，R.，Goff, S. B.，Kaczala，C. M.，Meece，J. L.，& Midgley, C.，1983, Expectancies, values, and academic behaviors. In J. T. Spence (Ed.) *Achievement and achievement motivation*. San Francisco: W. H. Freeman. Pp. 75–146.

Feather，N. T.，& Davenport, P. R.，1981, Unemployment and depressive affect: A motivational and attributional analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 422–436.

石毛みどり・無藤隆，2005，中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連―受験期の学業場面に着目して―教育心理学研究，**53**, 356–367.

鎌原雅彦・亀谷秀樹・樋口一辰，1983，人間の学習性無力感（Learned Helplessness）に関する研究　教育心理学研究，**31**(1)，80–95.

神谷俊次・伊藤美奈子，1999，挫折体験の受容と有能感　日本教育心理学会総会発表論文集，**41**, 548.

佐藤徳，1999，自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について　教育心理学研究，**47**, 131–140.

Seligman, M. E. P.，& Maier, S. F.，1967, Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, **74**, 1–9.

齋藤憲司，2005，第2章3節　大学生の無気力　大芦治・鎌原雅彦（編）無気力な青少年の心，Pp. 87–98.

下山晴彦，1996，スチューデント・アパシー研究の展望　教育心理学研究，**44**，350–363.

神藤貴昭，1998，中学生の学業ストレッサーと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響　教育心理学研究，**46**，442–451.

鉄島清毅，1993，大学生のアパシー傾向に関する研究―関連する諸要因の検討―教育心理学研究，**41**，200–208.

内田千代子，2007，大学における休・退学，留年学生に関する調査―第28報　第28回全国大学メンタルヘルス研究会報告書.

Walters, P. A. J. 1961 Student Apathy Blaine, G. B. Jr. & McArthur, C. C.（Eds.）*Emotional Problems of the Student*. New York: Appleton-Century-Crofts.　笠原嘉・岡本重慶（訳）1975．学生のアパシー　石井完一郎他（監訳）学生の情緒問題　文光堂，Pp. 106–120.